

尊敬語補助動詞類の分布とその史的経緯

——『方言文法全国地図』「書きますか」を主として——

彦坂佳宣

一 本稿の課題

『方言文法全国地図』（以下、G A J）「書きますか」（A・Bの2場面）から尊敬の補助動詞類をとりあげ、各地方言を含む日本語史的な面を考察する。この地図はG A Jにある他の尊敬語の地図と似て、ひとまず尊敬語の全国分布を表すものと考えられるものである（ただし、男性インフォーマントのみであることに課題を残す）。

この種の全国視野による敬語研究は、藤原与一（一九七八）で各地の敬語形式の生態的な模様が豊富な用例に基づいて述べられ、氏の言う分派の示唆もある。既存調査を総合した加藤正信（一九七三）も、各地の用法のほか、既に指摘のある東日本にいわゆる無敬語地帯があることに加え、紀伊半島・四国・九州東部にもそれのあることを指摘した。やや広域な調査・研究には飯豊毅一（一九九四）がある。これらの研究も参照し、上記の言語地

図の史的解釈を試みたい。なお、北海道は移住による方言のためこの研究になじまず、沖縄は理解が及ばないため、考察から省く。

G A Jの解釈には、国語史の知見のほか、各地の過去の方言文献の援用も必要である。しかし、敬語事象には多様な形式が現れて整理が必要であり、紙数の関係で今は国語史のみを参照する。国語史は、中央で生まれたことばの歴史で、その威光が周辺地域に影響し、各地方言を領導する位置にある。G A Jの今日的な敬語分布の平面と縦の柱の国語史との相互関係を見極めながら各地の尊敬語の歴史を考えていくのである。

直接の考察対象とするG A Jは、共通語化が進んだ時期の資料ながら、昭和五〇年代前半の齊一な調査基準による全国的規模の調査で、各地諸形式の比較が可能であり、全国視野の言語地理学的な研究対象として格好のものである。既に本稿と同じG A J「読みますか」の解説には大西拓一郎（二〇〇六）があるが、G A Jの紹介の特集の事情で概括的であり、史的面の考察はなお課

題である。

二 GAJの関連図および参考文献

GAJの尊敬語図は複数あり、対者に言う場合と第三者について言う場合がある。前者は、A場面「近所の知り合いに丁寧に言う」、B場面「土地の目上に非常に丁寧に言う」の2場面設定も含む（以下、A段階・B段階とも言う）。この待遇的場面差や待遇の対象が対者か第三者かの差により、諸形式の待遇価値（の差）を見る便宜も得られる。

これらの図の番号と質問をまとめると左のようである。問題の尊敬語形式は、下の質問文の傍線部分を取り出して考える。

1. 「対者に言う場合」―質問表現「ひと月に何通手紙を書きますか」

GAJ273図―A場面図 同271図―B場面図

2. 「第三者について言う場合」―質問表現「あの先生は行くのか」(友達に聞く)

3. 「命令的表現」―質問表現「行きなさい」(B場面のみ)

また、参照する先行研究のうち重要な広域のものを示し、以後この文献番号で示す。他のものは、本文中に随時示す。

文献I 1. 藤原与一(一九七八) 全国を対象 2. 同(一九九〇) 中国四国近畿九州を対象

文献II 1. 奥村三雄(一九九〇) 敬語史 2. 楳垣実・他

(一九六二) 近畿を対象

文献III 1. 飯豊喜一(一九八四) 北陸を対象 2. 同(一九

九四) 東日本を対象

文献IV 1. 奥村三雄(一九七六) 岐阜県を対象 2. 彦坂佳

宣(一九九一) 愛知県周辺

文献V 大橋勝男(一九九八) 新潟県を対象

三 GAJ関連図の言語地理学的研究

三・一 「ひと月に何通手紙を書きますか」

―A場面を主、適宜B場面も

この2場面の分布図は、分布も複雑なため、国語史の知見を利用し、尊敬語形式をあらかじめ古代語と近代語に分けて略図とした。都合4図となるが、近代語図はそれでも複雑なため2分し、都合6図とした。次のようになる。なお、近代語図で2分した場合、併用記号「」は残したので、記号が1つでも、これがある場合の他の併用形式は別図に現れることになる。

古代語類

近代語類

A場面 図A1 図A2.1 図A2.2

B場面 図B1 図B2.1 図B2.2

本稿の図はGAJの原図を、地点はそのまま、形式は適宜まとめた略図である。まとめ方で重要な点は本文中にふれる。

国語史による古代語と近代語の区分

国語史の尊敬語形式は山崎久之(一九六三、今は二〇〇四年版)、第四編の京都・大阪語資料の「室町〜江戸後期」の男性語の諸形式の概括表に求め、表1とした。また、そこに彦坂がGAJに現れる主な形式の発現時期を、先行研究も参考にして加えた。参考にした研究は、ナサル類など(「ら」るる)語尾をもつ敬語型の成立を考察した坂梨隆三(一九七五)、近世またそれ以降の上方のものは原口裕(一九七四)・奥村三雄(一九九〇)・金沢裕之(一九九八)、これらを含めても表1は基本的な形式のみであるが、本稿の考察にはこのレベルで足りると考える。他の複合形のサシヤンス、ヤンスなどは必要に応じてふれる。山崎氏のもものは男性の形式であるが、地図の主要形式ともよく対応し、本稿の考察に特に不足はないと考える。

表1で、大きな変化を見ておくと、〈A〉室町時代の下二段型の「(x)せらるる」「なざるる」が、〈B〉以降の近世語では「(x)しやる」「なざる」の四段型になる。そのナサルは「追加」項にあるナハルさらには近世末期からハル化し、マスも後接する多様な形式が生まれた。「遊ばす」も生まれる。また「テ指定辞」(テジャなど)、教養層などからオ〜ニナルも加えた。謙譲・丁寧語は入れていないが、早く「申す」があり、続いて「参らす」から丁寧語マスを生む。

なお、(サ)シャル類は、近代語の範囲であるが、古代語的な面もあり、古代語図に入れる。「読ム」、また「読みマス」類も尊敬語自体でなく、共にいわゆる無敬語的な点から、便宜、古代語

表1 山崎久之による待遇体系一覧表

国語史の尊敬語(山崎久之2004、第四編第二章より抄出、助動詞・補助動詞のみ)

〔追加〕項は彦坂による 「*」は位相性大

待遇段階→	一	二	三	四	五	追加 (尊敬)	(謙譲・ 丁寧)
〈A〉室町時代 末期 (男性語)	させらるる お…なざるる お-ある(やる)	めざるる お…やる	しめ・さしめ い・さい	通常 動詞 形	をる		申す/ 参らす ます
〈B〉近世前期 上方 (男性語)	(御)-なされま す (御)-遊ばされま す (御)-遊ばしま しやり(れ)ます	(御)-なざるる (御)-遊ばざるる (御)-遊ばす しやる	-めざるる やる お=やる(武 士・老人)	通常 動詞 形	をる・ほざく くさる けつかる		テ指定辞* ます オ〜ニナル*
〈C〉近世後期 上方 (男性語) (化政期)	(御)-なされま す (御)-遊ばしま しやります	お-動詞 なざる しやる	やる たも 連用形命令法	通常 動詞 形	やがる をる くさる		ナハル* ハル(近代)

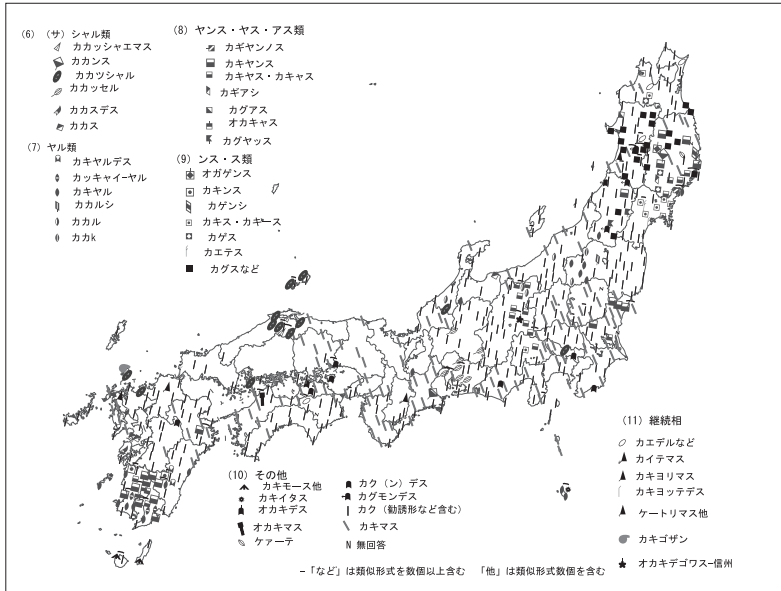


図 A.1 「書きますか」 古代語

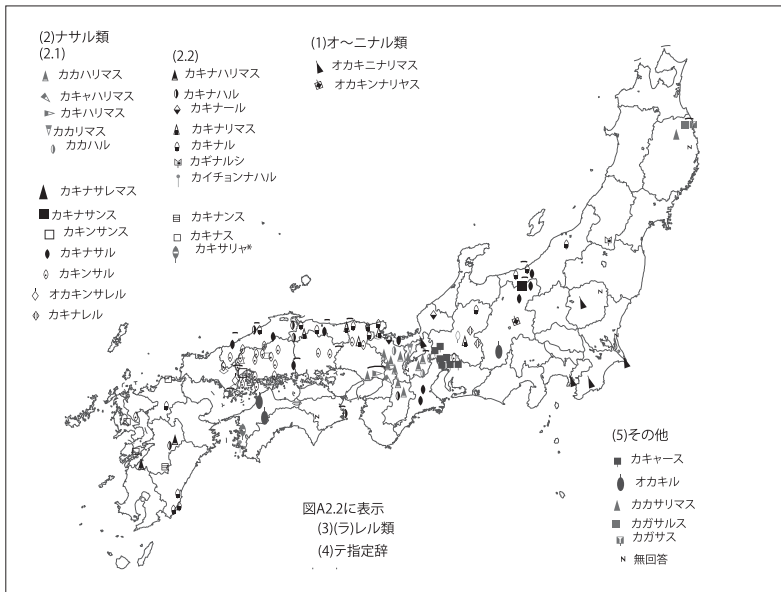


図 A.2.1 「書きますか」 近代語その 1



図 A 2.2 「書きますか」近代語その2



図 B 1 「書きますか」古代語

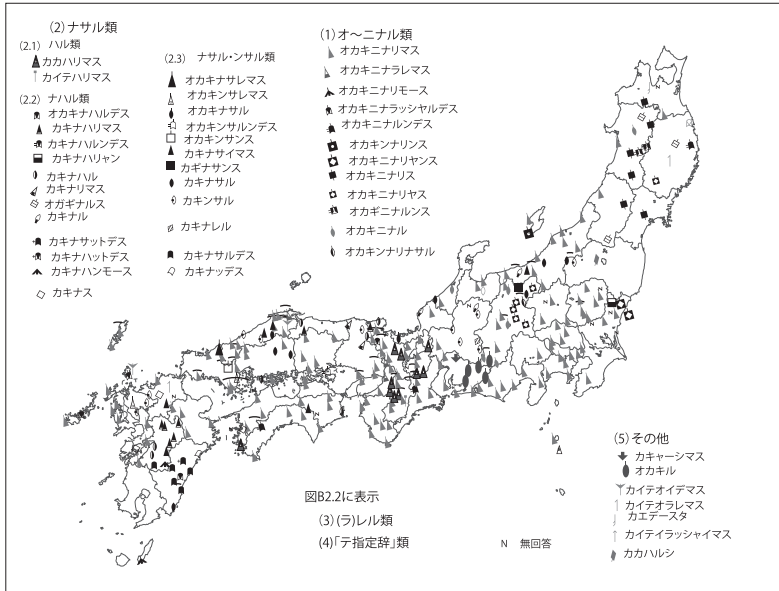


図 B.2.1 「書きますか」近代語その 1

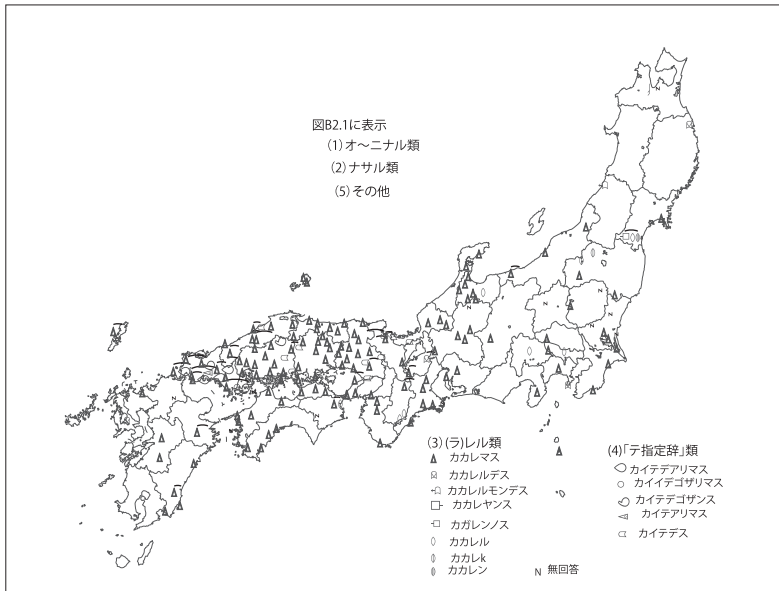


図 B.2.2 「書きますか」近代語その 2

図に入れた。各図の凡例形式類の番号は共通であり、ほぼ高い敬意から順に番号を付けたが厳密ではない。

古代語・近代語6図の総合から

都合6図の「書きまますか」の総合から概括的特徴をまず把握し、まとめておく。

1. 古代語図類A1、B1の形式は日本の東西端に分布するのに対し、近代語図類A2.1・2.2、B2.1・2.2はほぼ日本の中央部、特に西日本に厚い分布がある。この意味は、かつての中央語の近畿のことばが、古代語として日本全体に行き届き、続いて近代語が近畿の周辺地域、特に交通路の発達した西日本に被さり、西高東低型の敬語分布となったと見る。

2. 近代語図類のA・Bの2.1・2.2では、高い待遇場面のBになると東日本にも分布が厚くなる。当然これと逆の相関で、古代語類の図は西日本より東日本に分布が広い。この意味は、近世後期から都市・江戸が成立して江戸語が強くなり、ここからの放射も始まる。さら明治以降、標準語の成立、また国定教科書による教育などにより、関東からの放射が強まった結果であろう。

3. 中部地方にも古代語的な形式が散見される。これは、上記1の古代語の勢力が近畿から西の九州・東の中部地方に古代語類の外輪を形成し、東部方言との境界的な地域になったことを意味しよう。

以上の概括を念頭に、以下、各図につき具体的形式を検討する。

三・一・一「ひと月に何通手紙を書きまますか」

—主に近代語図の考察

主に近代語図のA場面の図A2.1とA2.2を考え、関連する事柄をB場面図でも見る。凡例形式の番号はどの図も同じである。以下、動詞「書く」、接頭語オ、マス後接形などについては必要の限りでふれる。また主要形式に焦点をしぼる。推量や条件形式は他に同類の終止形相当があればこれに統合、なければ凡例の肩に「*」を付けた。これは尊敬語形式の乏しい地域で丁寧さを示す方策と思われ、地域差もあるが、詳細は省く。

(1) オーニナル・(2) ナサル類

まず、図A2.1で、左斜め三角記号の(1)オーニナル類は高待遇形のためA段階に稀で、B段階になって激増する。関東中央からの標準語の放射のため、この段階になっての増加である。

(2) ナサル類の低位形式は、薄い三角・楕円類の(2.1)ハル類が近畿に狭く、半白の濃い三角・楕円他の(2.2)ナハル類は奈良・徳島・山陰など近畿からやや離れた地域、飛んで九州にある。さらに黒の三角・四角、多数の楕円類(2.3)ナサル・ンサルは、一段と近畿から遠く、西日本に広く、濃尾・中部地方にもある。以上の(2)ナサル類は近畿からの放射である。

分布からの史的推定は、この逆順に、遠隔にある(2.3)ナサル・ンサルが早くに近畿中央に出現して放射され、次にナサルが(2.2)ナハル類に変化し放射され、今日そのナハルが近畿中央で(2.1)ハル類となり、京阪地域特有の形式として存続し、他の図

を見ると敬意・使用場面も広い。

以上は国語史の表1を見ても合致する。オ・ナナルは〈B〉近世前期でも初期は教養層に限定的であった。ナサルは〈B〉にあり、彦坂の追加欄の下部、近世後期のナハルから近代のハルを辿る変化である。山崎氏のものにナハル以下が無いのは、ナハルが女性語とくに遊里のそれを主とするからである。ハルの出現は近世末期以降のことになる（金沢裕之 一九九八）。

ナサルの詳細は、坂梨隆三（一九七五）によれば、中世末頃の「成す+（ら）るる」組成による下二段型が、近世初期頃から一体化して四段型「なさる」となった（二段型は今日なお九州にある）。さらに近世後期にサ↓ハを経てナハル、末期に、文献Ⅱ—1・2などの指摘のとおり、「書く」を例にとれば「書キヤハル・書キハル」などを経てハル化したものである（今日、京都は「書かハル」大阪は「書きハル」）。

以上を念頭にさらに詳しく見る。まず（2.1）ハル類は近畿中央にあり、B場面の図B21でもなお強い分布で、京阪地域特有の方言敬語形である。（2.2）ナハル類は多様で広いが九州のナハルは孤立し、ひとまずこのナサルから独自の変化と見る。近畿外辺の若狭に見えるナールは付近のナハルからの変化に違いない。

ナルは九州から新潟まで広い範囲、やや遠隔地にある。西日本のもものは九州を含めナハルからナハル・ナールを経た成立であろうが、東の中部地方にはナサルはあるがナハルは近畿寄りのみ、そこで新潟地域のナルはナサルからの変化であろう（一時はナール

も想定されるか）。（2.3）ナサル類所属の形式は、ンサルが中国地方の山間部に多く、東部では濃尾地方にある。これがB段階の図B21を見ると、中国地方では減退し、濃尾ではよく現れる。同ンサルでも西よりも東側が相対的に高い待遇である。また濃尾にナサレル形があり、ナサルル型から一段化したものではないか。この一段化については彦坂（二〇一四）でふれた。

（5）その他の形式

図A21で濃尾に固まってあるカキヤースは、近畿のヤースと同じく近世中期以後の「遊バス」出自（文献Ⅱ—1、2の43頁参照）。彦坂（一九九一）でも近世後期尾張の郷土本に「キヤースバス形のような過渡形があることから同じ出自としたが、図B21では見えない。強い訛音の方言形で衰退したのであろう（尾張周辺では気安い形式としてなお頻用）。また信州・四国の「オ+一段式」（オカキル）は近世京都の成立で、島田勇雄（一九五九）・都竹通年雄（一九六五）があり、中期以降、上方に多く、今日の非連続的分布の理由を概して女性・遊里的な性格に求める。杉崎好洋（二〇〇九）は各地の形式と分布をさぐり、近畿・愛媛・愛知県三河から東美濃と南信州に亘る分布があり、周辺分布をなし、近畿圏の旧城下町・港に多いとする。なお、彦坂は輪島でも聞いた。やはり近畿圏地域に伝播し、やがて固有地域で残存したものであろう。

他の形式は今略す。

（3）（ラ）レル類・（4）「テ指定辞」—図A22、B22類

次に、別図とした図A22の「テ+指定辞」、(ラ)レルを見る。両者は西日本で分布が重なり、B場面でも競合の関係にある様子で、特に取り出した。

まず、(4)「テ指定辞」(テジャ・テヤなど)は、西近畿から中国地方山陽側に多く、かつて山陽側にもあつたナサル類を幾らか北部に追いやつた状態がGAJの模様と思う。文献I-1は、北陸にもあるが(中井 二〇〇〇)にもあり、分布は主に「近畿以西」とする。兵庫・岡山県の模様は都築直也・編(二〇〇六、二〇一三)などに詳しく、岡山県は西北山間部の中年以上にも使用されている。先引の奥村・金沢などによれば、近世中期以降に勢力を増すもので、女性に多く、やや位相性があり、第三者に於いての用法が多いとする。これがナサルの勢力に比し、近畿に隣接し中国地方では新しい形式の多い山陽側に主領域をもち、しかし日本の東部にはあまり伝播しなかつた要因と思う。そしてB場面図では減退し、同地域での(ラ)レル類の増加が目立つ。

その(3)(ラ)レル類は主に三角また楕円とした。A場面でも多いが、B場面では一段と増し、中国地方では「テ指定辞」を圧倒しつつある。特に岡山県では、(ラ)レル類の勢力が強い(山間部への経路の多いためか)。この増加はひとまず共通語化に沿つたものと見る。ただ、東は濃尾・北陸付近までにとどまり西日本の形式の印象が強く、関東地方に少ないことに問題が残る。共通語は標準語を基とし関東中央出自なのに、関東地域には少ないのである。

この増大する(ラ)レル類は、別の問題として古典語(ラ)ルとの関係がある。近代語ではすでに一段化しているが、土屋信一(一九七四)は江戸語にこの語が稀なことを指摘(あつた可能性を探る)、金田弘(一九五二)は近世の東国にやはり稀として、これが盛んとなるのは明治期の言文一致の運動によるとする。

すると、GAJの近畿圏内で盛行するのは、かつての古典語が何らかの形で継承され、一段化し、加えて近年の共通語化によりその勢いを増した可能性を考えたい(神部宏泰 二〇〇七も参照)。近世上方での(ラ)レルの用法は停滞気味ながら、その後、共通語との連動で勢力を増したと推測する。近世知識人の使用は多く、それが金田の言う言文一致、また国定教科書などへとつながつた時期のものではないか。この点の論証は紙数の関係で別稿としたい。

三・一・二 「ひと月に何通手紙を書きますか」

— 近代語図Bの考察

B場面図もさらに見る。A段階から増えるのが(1)オーニナル類、(3)(ラ)レル類で、減るのは近畿に多いハルを除く(2)ナサル類、(4)「テ指定辞」である。要するに今日的な共通語化が強まるのである。

(1)オーニナル類は、接頭語オ、末尾にマス・ラレルを後接させて増加し、関東中央は強く広く、山間部などを除き、東海地方から近畿まで連続し、四国・九州にも届いている。日本海側も

非連続ではあるが見える。ただ周辺地方ではオウニナリヤンス・オウニナリモースなど既存の方言形との複合も多い。この分布は、まず近世中頃の教養層などの形式が関東で標準語となり、他地域に共通語として既存形式に被さる形で侵入したのであろう。図 A11 で無敬語のなにも図 B11 で現れる、埼玉県・四国・九州東部などはまさにこれであろう。近畿では、しかし旧来のハル形も残り、京阪の特有形式も保たれている。

(2) ナサル類もオ、マス付加形が増えるが、近畿から中国・四国では減退し、逆に(3)(ラ)レルが増す。しかし、遠隔地ではなお(2,3)ナサル類が健在で、近畿から新潟まで、また九州中部以北で維持されている。九州では北部の一部で(1)オウニサル類も多いが、概してナサル類が主体で、やや辺鄙な西北地域にナサル、熊本県付近には南部を除きナサル類があり、東部にも展開している。なお彦坂は南部の人吉で連用形「ナツた」も良く聞いた(二〇一四年三月)。これが東部の宮崎ではナサルが多く、鹿児島県ではこれらが無く、概して後述する古代語的形式のヤル・モース類となる。

他に、(4)「指定辞」類が減り、(3)(ラ)レルが拡大することとは既に触れた。

(5)「その他」は地方的形式で、「オ+一段式」のオカキルが愛知県付近に残る。会津のハルシはヤルカ(サ)シャル類かである。その他は略す。

三・一・三 古代語図の考察—図 A1・B1

次に古代語図の A・B 場面を見る。

まず、便宜ここに入れた「書ク・書きマス」は述部に特有の尊敬形式がない、いわゆる無敬語とされ、従来、三河以東、後に加藤(一九七三)が西日本の紀伊半島・四国・九州東部などを加えた地域にある。ただ、注意すべきは、後述のように、この地域もかつて尊敬語形があった徴証があり、史的な意味では全くの無敬語地域ではない。

敬語形式では、(6)(サ)シャル類、(7)ヤル、また九州・東北に多い(8)ヤンス他と(9)ンス他、そして(10)「その他」のモース・イタスなど、(11)「継続相主体」(他の形式と結合なら他形式を優先)などがある。以下、これらの主なものについて見る。

まず(6)(サ)シャル類は、A 段階の図 B11 では島根県に多く、九州西北部、北陸、濃尾(ここは(サ)ツセル形)にもある。これが B 場面の図 B11 になると中国地方は減退し、近畿圏の東部になる濃尾・北陸・新潟・会津などで増加する。このように東日本での(サ)ツシャルはなお敬意が高い。川本栄一郎(一九八五)は、新潟地方につきナサル形が訛音化し(サ)シャル類の相対的価値が保有されている意味を述べている。この点は上記の近畿圏内の東部地域に広く適用できるものであろう。近畿の勢力が及ぶ東限の地域で、概して古態的な形式が保たれ、かつナサルなどの訛音形化の中で(サ)シャル類の地位が高いのである。

次に(7)ヤルは更に周辺の九州南部や会津付近に多く、分布の広さからして(サ)シヤル類に先行する形式である。表1の国語史でもヤルは(サ)ツシヤルより早い。後で見える岩手県付近のヤンス類にもヤルの遺存が見られ、九州と東北にかなり広くある。

最後に四角記号類(8)(9)を見る。日本の東西端と中部・関東地方周辺に分布するものである。これらは出自が分かりにくい熟合形で、ひとまずヤスとスの形式をもって二分した。

まず、九州南部に多く、岩手県にもあるカキヤンス・カキヤスなどは「書きヤリ申す」の熟合であろう。中世末ロドリゲス『日本大文典』の「申す」項に「板東で下賤な者共の間、下では主として肥前、肥後、薩摩、日向の国々で『まらする』の代りに盛ん」(土井忠生訳 五八六頁、要旨)の記事が参考になる。北条忠雄(一九三六、二〇四頁)・上村孝二(一九九八、一二七頁)、東北は北条忠雄(一九八三)が言うには、ロドリゲスの記事を参照し、今日もこの「申す」があり、ヤルとの熟合も多いことを指摘している。

この目でGAJを見ると、九州南部の中央に(8)ヤンスがあり、外辺に(7)ヤル、種子島付近には(10)「申す」単独形があり、ヤルから複合ヤリモース、そして熟合ヤンスへの変化が分布に現れている。

一方、北奥羽の諸形式、とくに秋田のゝス類は由来が分かりにくい。北条忠雄(一九八三)は、岩手県和賀郡「アナダサマニ仕

エデキモシタ」「ツボッコ(田螺坊)ドノヤ、寝モサイ」などを挙げ、「このモスは一般にンスさらにはスとなつて溶け込んでいる場合が多い」とし、秋田・仙台、茨城・群馬・千葉、そして東京「オイソガシューゴアスカ」もこれとする(傍線彦坂)。

すると、図Vの秋田県北部カクアスは「書きあり申す」、図B1での秋田県北部カクデアンスを「書くであり申す」、カクンデガス・カクドガンス(下は「所」)のガス類は、北条によれば「嬉しグアリ申す」出自のガスの汎用とするようである。ただ、GAJで見ると青森との境のカギスと秋田のカグスの接続法の違いもあり、細部の説明は難しい。あるいは「申す」のスが独立接辞となり、カグスなど終止形接続も可能になったのか。問題を残すが、ひとまず「申す」の潜在があるとしておく。

類似形にはヤスがあり、近世語で、湯沢幸吉郎(一九三五)にはヤースが「あり(やり)ます」ないし「さんす」(この組成は(サ)シヤル+マス―彦坂注)出自かとするが、丁寧語マスの進出がどのくらい北東北に及んだか、近代語形式は別として、検証が難しい。関東地域になると丁寧語マスの進出も考えられ、関東のス類を「申す」で説くことは今は保留する。

以上によれば、九州南部と北奥羽地方に「申す」出自の諸形式があり、ヤル分布地域よりさらに先端に古い周囲論的な模様が現れてくる。ただし、大西(二〇〇六)の指摘のとおり、次節の「先生は行くのか」図も見ると、九州の「申す」は尊敬語用法もあり、東北のそれは丁寧語的なもので、本動詞からの地域的変異

の度合いに違いがあり、九州の変容が著しい。

なお、九州の「申す」は、丁寧語マスの活躍を制しているようである。上村孝二（一九九八）はマスの元の「参らす」はなお謙讓語性が強く丁寧語になりきっていないとする。また、ナサルデスなど、マスが期待されるところにデスがある例も散見される。これは先引・加藤正信も地方に類例があることを述べている。九州南部のような「参らす↓マス」の変化の遅速とも関連する可能性もあるが、今は整理が及ばない。

また、(10) のうちイタスはかなり古いもの、(11) の継続相の表現も尊敬に関与するかもしれないが、今は略す。そして、以上の古代語的な諸形式が、日本の東西端に加えて、中部・関東の周辺部にあることも、日本語史の経緯を説くのに重要であろうが、この点は後で触れる。

三・二 第三者についての尊敬、命令表現の地図から

次に、第三者への待遇のGAJ295図「あの先生は行くのか」(図3とする)と命令表現297図「行きなさい」(B場面のみ、図は掲載略)を、特有敬語動詞形を除き、一般動詞の模様を上記の図類と比較する。なお、紙数の関係で、命令表現の図は示せない。GAJを参照されたい。

待遇表現は、一般に対者への表現に新形式が生じ、第三者についての表現、命令表現へと使用域が広がり、敬意も落ちる傾向がある。この敬意対象場面の違いから、個別形式の敬意の広狭・高



図3 「あの先生は行くのか」(親しい友人に)

低の変化を探ることが可能となる。

第三者についての待遇「先生は行くのか」(図3—親しい友達に)

第三者への待遇の場合、場面を構成する聞き手によって表現が変わる。図3は「親しい友達」相手で、ごく日常的な場面が想定される。

こう考えた上で、今までの対者への「書きますか」A・B場面と比べると、分布の拡大は、今までの凡例番号の(2)「ハルが奈良・滋賀県にも出て、(4)「テ指定辞」は岡山県を除く中国地方で、(6)「サ」シャル類も九州北西部(同類の「行カス」形も長崎・熊本県付近に)、北陸、長野市から中・上越、会津に増え、濃尾で同類(サ)ッセルも広がる。ヤルは九州中部以南に広く、会津には「エガル(行ガル)」形化(飯豊 一九七四参照)して多い。また、微弱ながら九州の宮崎・長崎県に散見される「行カ」は(3)の旧二段型(ラ)ルル出自で、低い敬意である(鹿児島県にも潜在の模様)。「オ+一段式」のオイキルも瀬戸内海沿いの中国・四国の西部に現れ、愛知県三河にも見える。

分布が減退するのは(23)ナサルが山陰で(4)「テ指定辞」に圧迫され、新潟でもやや減り、(ラ)レルも岡山県を除き減る。

つまり図3で増加する形式は、「書きますか」場面では各地域のやや軽い待遇形式であったもの、その分布が拡大している。多くは親愛的な用法で、対者に使用する形式よりも古く日常的なものである。国語史では、表1での(A)室町ないしそれに近い、ヤル・(サ)シャル類、さらに古い(ラ)ルルなど古態形式

であり、図3になると変容度も高く方言化している。複合形の多いこともその一環で、西日本圏の北陸・中国・四国・九州にナハンス、山口県にンサンス、金沢にマシヤルなどがあり、地方文献を博搜すれば更に増すはずである。地方の残存的形式が第三者への場面に現れ易かったのであろう。

また、近畿のハル、中国の「オ+一段式」などはかなり待遇域が広い。一方、「行く・行きます」形のいわゆる無敬語の分布域は同じである。

命令的表現の場合「行きなさい」(B場面)

この図示は略すが、やや高い敬意のナサル・ナハル類の命令形相当が、四国・紀伊半島などの南部や大分県、また関東地方にも断続的に見られる。B場面でもあり、命令表現でもあり、各地での高めの待遇形式が選ばれたのであろう。そして関東地方にもナサル類が現れ、かつては他の活用形も定着していたことを示唆する。

この表現の場合、「〜て下さい」を意味する後接形式も多く、注意が必要であるが、ひとまず主部の形式を見ると、複合形的重要も加えて、九州から、新しく南東北までヤルに加え(6)「サ」シャル類の分布があり、その内側は九州南端を除き、新潟・関東までおよそナサル類があり、近畿・北陸の一部にハル類がある。複合形や今までに無い、近畿ではオイキヤス、周辺部で〜シャン七などもあり、「先生は行くのか」より更に多形である。

命令形も第三者への用法と同じく旧形式の伏在を示すと思う

が、東北の(サ)シャル類などは、命令表現の一人歩きもあり、活用形として定着したかはどうか注意が要る(文献Ⅰ―Ⅰを見る)と東北地方の(サ)シャル類は命令表現が主である)。しかし、多彩な形式の出現は、かつての存在を示唆する点で史的推定には重要である。

多彩な形式が多いのは、対者への場面では、相手へ支障ない妥当な形式が意識され、各地の通常・多用な形式に収斂する傾向に対し、気楽で親愛的な面も出るためであろう。

G A Jには親愛的な場面の調査がなく、残念である。恐らく、さらに低く気の置けない形式が潜在していることであろう。これらを含めた各地方言の体系的な模様はなお課題である。

四 先行研究類の参照

ここでは、先行研究の主たるものを参照し、以上の推定を補正する。紙数の余裕がなく、広域のものに限り、他は後日の補正を期す。

西日本は、「文献Ⅰ―Ⅱ」の図37「To take a look (Honorific Form)」をとりあげ、図4とした。一九三三・三四年、女子師範生による各地の調査である。

まず、ハルが近畿に分布する点は同じ。ミヤハルと混在し、ここからハル化したとの文献Ⅱ類の推定を補強する。その前身のナハルが近畿から、瀬戸内海を経て四国西部に届き、近い九州にも

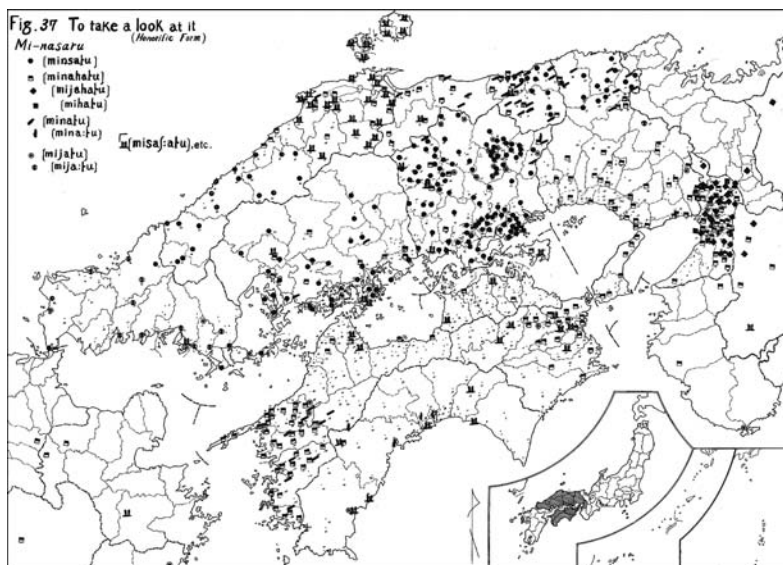


図4 「見なさる」藤原与一(1990)より

ある（九州は瀬戸内海經由か、既存のナサルから独自にか、即断できない）。山陰側を西へと伝播していることも見える。そしてナルはナハルと隣接するか、山陰東部のようにナハルが通過した地域にあり、ナハル出自であろう。一方、ンサルは岡山・広島の間部・島嶼部、島根県西部に多く、兵庫県北部にもあり、概して辺鄙な地域に残存し、やはりナハル以前のナサルが地域的に変化したものではない。瀬戸内海島嶼部も注目され、ナサルが山陽側にも広く伝播した証拠である。四国南部には伝播がない。

一段と古い（サ）シャル類は島根県の石見・瀬戸内島嶼・四国土佐地域にあり、更に古いヤルが西端の山口県に多く、各地にも散在する。この点につき、先の三・一・三節の古代語図の整理では、四国南部を無敬語地帯としたが、幾らか（サ）ツシャルがある。ここを無敬語とするのは尊敬語がなく丁寧語のマス形のみのため。しかし、この古くなった（サ）シャル類の代替として共通語のマス後接形を採用したとも考えられる。そう考えると無敬語地帯とするのはそぐわず、多様な形式の乏しい地域で、手早く共通語的マス形式を採用したのではないか。

なお、図4には「テ+指定辞」・（ラ）レル類が現れず、評価の手掛りがない。これらが無かったとは考えられず、師範学校生徒の敬語意識による所為もあるうか。場面の説明もなく、対者へか第三者を話題としてなのか不明である。ごく一般的な敬語形式の存否の図として受け取っておく。

兵庫・岡山県付近は都築直也・編（二〇〇六、二〇一三）があ

ることは先述した。岡山県は特に（ラ）レルが多い中に、西北山間部には「テ+指定辞」が残り、G A Jを補う。大きくは、「テ+指定辞」がナサルを山陽側から北に圧迫し、さらに（ラ）レルがこれを塗り替える模様のあることは、G A Jによる推定と同じである。

文献Ⅱ類は近畿地方に詳しい。これも詳細は省くが、ナサル↓ナハル↓ハルの変化、他の諸形式の分布などがあり、G A Jでの推定に生かした。

次に近畿の影響下にある東側地域の北陸は、「文献Ⅲ―1」が有益である。同種の質問でも質問文ごとに回答が多様であるとするが、大まかには（ラ）レル類は富山県、（サ）シャル・マシャル類・「テ+指定辞」は石川県、ナサル類・ヤル類は福井県に有力で、相互に交渉していると（47頁）。原図によれば、ナルは福井・石川県西部に散見される程度で、ここは近畿のナハル勢力の境界付近で、やはりナハルからの変化であろう。富山は中井精一編（二〇〇〇）58図「行くのか（目上・親しい）」もあり、詳細は略すが（ラ）レルが広く新（サ）シャル類は東西の両端のやや山間地で古く、ヤルは山間地に稀で更に古く、ナサルは少なくナハルは無く、飯豊のものとは矛盾しない。

文献Ⅳは、近畿圏の東限、東海側のものである。奥村（一九七六）では西の美濃西部にはナハルが伝播し、他はナサル・ンサルが多く、濃尾は（サ）ツシャル・ナレルが注目され、彦坂（一九九二）では、共に二段型の出自から直接に一段型に変化した可

能性があるとした。また「遊ばす」出自のヤースもあり、名古屋周辺に多く、都市的な敬語として飛地的に受容したのであろうが、GAJでは衰退気味である。(サ)シャル類は、他に尾張周辺では(サ)ツセルないし(サ)ツシル形が強い。ヤルは稀。また、近世後期戯作類には親愛的(ラ)レルがあり、古典語の継承であろう。

次に、文献V新潟県第100図「どこへ行くのか(対目上)」(実地調査は一九八〇～一九八五年)によれば、北越を除きナサルが広く、ナルは隣接して上越に集中し、中越にも僅かにあり、これに対し全体にナハルは無く、ナルはナサルからの変化と考えられる。(サ)シャル類が中越の山間部に多く、全形式中で最多である。ヤルも上越に1地点ある。北陸からここに至ると、一段と古態形式が現れる。会津での(サ)シャル類・ヤルの盛行は新潟側からの影響であろう。以上、全体にはほぼGAJでの推測を確認できる。

文献Ⅲ―2は広く東日本の調査である。ただ調査期間が長く、多彩な形式の分布記述で、史的観点による整理は乏しい。しかし、無敬語とされがちな関東・南東北にもヤルは勿論、命令形でない(サ)シャル類もかなり出る。GAJでマス付加形のみのも地域も、史的にはこれら尊敬語が伏在し、それが古くなり共通語のマス付加形を採用したのではないか。無敬語地帯と言うより、尊敬語専用形式が乏しく、人的関係の上では率直な物言が多いこととの帰結であろう。飯豊によれば、敬意は言い回しや文末詞で表

すとする。

文献Ⅰ―1は全国の実地調査にもとづく大成であり、詳しい生態的記述と史的観点があり、有益である。個別形式には、紙数の関係で言及できないが、命令形(サ)シャル類が東北にも広くあること、九州での(ラ)レル・(サ)シャル類の四段化傾向など、地方的形式も加えた史的整理のためにも参考になる。この資料の活用は、別稿での各地方言史に注意した考察の機会としたい。

他に、九州方言研究会のもの、各地の調査報告書の類など多いが、これも略す。

五 まとめ―全国方言史の記述へ

以上、GAJの尊敬語図類の解釈を試み、広域視野の先行研究も参照して、尊敬語形式の変化を考えてきた。紙数の余裕がないので、以下、重要な点のみをまとめて、各地方言史の細部の記述は次の機会とする。

1. GAJによれば、国語史の古代語と近代語の所属形式が綺麗な周囲的分布を見せ、中央語が地域方言を領導した様子が顕著である。

2. 古代語では、早くに「申す」・ヤルが近畿から放射された。これらは日本の東西地域の先端に主として複合形化して潜在する。「致す」「ござる」なども放射があった痕跡がある。中世も遅からぬ時期の形式が全国に展開し、周囲分布の外輪を成したと考

える。次には近世初期の(サ)シャル類がこれを追って展開し、各地に定着したが、九州・東北の先端までは届かない。古代語の近畿圏が九州から中部地方まで形成された。

3. 近代語の時期には、(サ)シャル類の先行に続きナサル類が盛行し、西は九州中部、東は東海、北陸から新潟県まで展開した。これは近世期以降の近畿圏と思われ、周囲の分布の内輪と成った。また、恐らく早くから(ラ)レル、近世中頃から「テ+指定辞」類も近畿から放射され、瀬戸内を介して四国北部、また山陽側から山陰側へと進出を見せ、中国地方ではナサルを北に追いやった。(ラ)レルはその後、共通語形となり更に勢力を強め、関東地域にも見られる。

4. 西日本での(ラ)レルは古典語の継承であろうが、その後も主として近畿圏で共通語的に勢力を増したと推測する。ただ、(ラ)レルが近世期江戸では稀のため、その共通語意識は恐らく明治以後の標準語運動や国定教科書などによると考える。この点の精査は課題としたい。

5. 濃尾・新潟から東の主に関東地方では、江戸ではヤル・(サ)シャル類・ナサル類、遅れてオウ・ニナルが定着したのであるが、全体には都市化が進まず、多彩な形式に乏しい。しかし遡って上に古代語とした諸形式の定着はあったと推測する。その後、明治以後、急速に標準語のマス付加形、さらにオウ・ニナルが普及したのが今日の様子であろう。

6. いわゆる無敬語地帯は、三河〜関東、四国南部などに尊敬

語形式が現われなかったため名づけられた。しかし、かつてヤル・(サ)シャルの存在が想定され、後に共通語のマス形式を採用したのである。史的な面の検証が必要である。

7. 以上、古代語／近代語／標準語(共通語)の3つの史的層の伝播が想定され、前二者は伝統的な伝播による周囲の分布を形成し、最後に標準語の威光による共通語化が都市的な地域に教育・マスコミを通じて広がった模様があると考えられる。

日本語方言史をめざすものとしては、なお、中央語を受容した各地方言ごとの諸形式の層や個別的な変容を論ずるべきであるが、この点も次の機会としたい。G A J図が男性を対象とした点の補充も他日を期す。

引用・参考文献(初版論文が後に単行本所収となったものは、便宜、後者で示す)。

飯豊毅一(一九七四)「福島県におけるル・ラル敬語について」『国文学攷』49

飯豊毅一(一九八四)「北陸方言の敬語表現について」『金沢大学教育開放センター紀要』49

飯豊毅一(一九九四)「東日本における尊敬表現の分布と考察」『北海道方言研究会20周年記念論文集 ことばの世界』(同会叢書5)

大西拓一郎(二〇〇六)「書きますか(地図に見る方言文法)」『月刊 言語』35—12

- 大橋勝男編著(一九九八)『新潟県言語地図』高志書院
- 榎垣実(一九六二)『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 奥村三雄(一九七六)『岐阜県方言の研究』大衆書房
- 奥村三雄(一九九〇)『敬語辞』『方言国語史研究(第九章)』東京堂出版
- 加藤正信(一九七三)『全国方言の敬語概観』『敬語講座6』明治書院
- 金沢裕之(一九九八)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金田弘(一九五二)『東京語に於ける「れる型」敬語の性格』『日本文学論究』10
- 金田弘(一九七七)『对者敬語「申す」について』『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
- 上村孝二(一九九八)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 川本栄一郎(一九八五)『富山・新潟・岐阜県境地帯における待遇表現の場面差・年齢差・地域差』『富山大学人文学部紀要』10
- 神部宏泰(二〇〇七)『方言の論理』和泉書院
- 坂梨隆三(一九七五)『ラ行下二段活用の四段化』『国語と国文学』52—1
- 島田勇雄(一九五九)『近世後期の上方語』『国語と国文学』36
- 10
- 杉崎好洋(二〇〇九)『「お行きる」の系譜と分布域の形勢』『名古屋・方言研究会会報』25
- 都染直也・編(二〇〇六、二〇一三)『JR播但線・山陰本線 姫路―福知山間 グロットグラム集』124 『行く』の敬語表現』『JR姫路線―新見間 グロットグラム集』126
- 「行く」の敬語表現、共に甲南大学方言研究会
- 土屋信一(一九七四)『江戸語の「れる・られる」敬語小考』『国語学』96
- 都竹通年雄(一九六五)『「お行きる」という言い方の歴史と分布』『近代語研究』1 武蔵野書院
- 中井精一編(二〇〇〇)『富山県言語動態地図』富山大・中井研究室作成
- 原口裕(一九七四)『「おーになる」考続貂』『国語学』96
- 彦坂佳宣(一九九一)『東海西部地方における尊敬語の分布と歴史』『国語学』166
- 彦坂佳宣(二〇一四)『関西と関東、二大方言の「あいだ』』『日本語学』33—1
- 藤原与一(一九七八)『昭和日本語方言の総合的研究 第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂
- 藤原与一(一九九〇)『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』和泉書院
- 北条忠雄(一九三六)『九州方言語法語法考序説』自家版
- 北条忠雄(一九八三)『東北・関東方言における待遇表現』『武蔵野文学』31
- 山崎久之(一九六三)『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院

(今は二〇〇四年増補版による)
湯沢幸吉郎(一九三五)『徳川時代言語の研究』刀江書院(今
は一九七〇年、風間書房版による)

(謝辞) 国立国語研究所「方言研究の部屋」のG A Jとデータ、
また地図作成プログラムに恩恵を受けた。原図の統合・改変は
彦坂の責である。本稿は科研費・基盤研究(C)代表・彦坂佳
宣(研究課題番号・23520569)の成果の一部である。

(ひこさか・よしのぶ 本学特任教授)

